

【子どもの観察例:フェイ】 (女児 1971年8月5日生 ;3歳10ヶ月から8ヶ月間の記録)

・1975/05/22・・・フェイはウエンディ・ハウスに誰か男の子と一緒にいた。彼女はどうやら赤ん坊をベッドに寝かせてお世話をしているらしい。彼らは他の誰をも入れさせまいとしている。フェイは、<誰も中には入って来れないんだから・・・They can't come in! >と言っている。

[日頃フェイの味わう独りぼっちの淋しさ、すなわち疎外感をこんな具合にして耐えんとしているということかしら。すなわち、自分ではない他の誰か子どもらを疎外するというやり方で。いつも彼女がやられていることを誰かにやり返しているというわけだ。事実として、普段は両親の寝室に立ち入ることは許されてはいないのだから・・・。‘外なる子ども outer-child’のフェイには疎外感が色濃い。]

・1975/10/02・・・彼女はミルク・サークルの時間、なぜかひどくぐったりとしている。私が座る彼女のお隣の椅子にもたれかかり、じっとしている。[時折彼女はこんなふうに、まるで中身の空っぽの‘木偶人形’みたいになる。もしかしたら、‘疲れきった worn-out 母親’に同一視しているのかしら？]

庭先に出て、どうやらすこし気分が回復したらしい。半年ばかり年上の女の子マヤサと一緒に‘家’を造ろうと話し掛けている。彼女が<赤ちゃんを連れてきて・・・>と言っているのが漏れ聞えた。さらにはどっちがママで、どっちがパパなのかについても話を進めていたように窺われる。それからしばらくの間、彼女らは庭のあちこちからボールやらビーンバック(クッション)を拾い集めてきて、樹木の下の彼女らの‘お家’に運び込んだ。しかしながら、これ以上2人の中で協調した遊びが進展することはなかった。残念ながら尻すぼまりで終わったようだ。フェイは気弱なところがあり、マヤサよりも6ヶ月年下であるから、マヤサに対してイニシアチブを取るのは無理だろうし、またマヤサにとって他の女の子が喜んで夢中になる遊びが今ひとつピンとこなかったのだろう。もしかしたら、女の子っぽいフェイが男の子っぽいマヤサにちょっと惹かれたということもありうるが・・・。2人がミス・マッチとも言えなからう、ただそれぞれ自分の中のこだわりの中に囚われていて、まだまだ互いに関係づけの次のステップへ踏み込めずにいるのだろう。ぜひこの続きが欲しいところだ。

・1975/10/10・・・ミルク・サークルの時間、お隣に座ったマヤサと一緒に‘くすぐりっこ’を始めた。しかし全体にはやはりフェイはいつも元気が乏しい。だが、レーソング・カーの所有を巡っては他の子どもらと争い、幾らか彼女も負けまいとして攻撃性 aggression を表したことはなる。

外でお遊びしようということで、ハリエッタが子どもらにコートを着せ掛けていた。そのとき誤って彼女の手が傍らにいたフェイの顔に当たってしまう。彼女はその痛みに悲しげに泣き出す。両腕に頭を隠したふうにして、そのまましばらく鬱々していた。

[何故こういうことが彼女の身に起こるのだろう、と私は訝しく思った。こうした‘事故’は滅多なことでは

起こるわけがないのに…。どこかで<ああ、やっぱり…ママは私が嫌いなんだ>といった感じがフェイの中で再確認されたのではなかったか。ハリエッタへの‘母親転移’という意味だが…。こうした行動化 acting-out は奇妙な‘辻褃あわせ’に聞えるが、結構あり得なくはない。つまり‘自罰的傾向’ということだが。フェイが親から体罰を受けているのだろうかとふと案じられた。]

フェイは、レーシング・カーを運転していた、気分はまだ晴れっとはしていないが…。俯き加減で鬱々としている。ハリエッタに誤って叩かれたショックから立ち直れないでいるらしい。そこにカレンという男の子が来て、その車に眼を止め、フェイに車を押してやろうと申し出た。だが彼女はそれには反応しない。おそらく彼は車に乗りたいのだろうと察したのか、すぐに車から降りて、カレンに譲ってしまう。まだ諍いにもなっていないのに。フェイに‘負け癖’が身に付いてしまってるわけではなからうが、どうも歯がゆい！

・1975/10/17…彼女は髪のをカットとして短めになって現れた。すぐに彼女は言葉なしに私の側に近寄り、そのままぼんやりと立ちすくんでいる。それからややあって、たまたま机の上にあった‘馬’たちに興味を覚えた。そこで彼女は、女性の人形を馬の背に乗せた。そして男性の人形をも同様にした。そこでお喋りがあれこれと始まった。なにやら物語がありそうだ。彼女はどちらかというに乗馬している男性人形に同一視しているみたいだ。それは軍隊の‘隊長さん’なんだとか。彼女は、軍隊ではどの人にも全員に馬が与えられるということを強調した。そこで私が、もしかしてフェイも軍隊に入りたいと思ってるの？と訊いてみた。彼女は否定する。<私、馬なんか持っていないもの…>とゲンナリとした面持ちでそう告げて、その場を歩み去ってしまう。

[‘馬’がペニスの象徴だとしたら、女の子にはそれは無い。だからわたしはダメだということか。まるっきり去勢された感じで鬱屈している！‘白旗’振っちゃってるわけ！]

彼女はドレッシング・コーナーへ行く。長いスカートを履いた。<私、お出掛けするのよ>と言う。その恰好で裾を広げて、ぐるぐると回転する。いかにも嬉しそうで満足げである。まるで自分がすてきな‘レディ’になった気分なんだろう。[ほんとに大人になる希望はどうすれば見つかるのかな？取り敢えずはママを模倣することらしい。ちょっと無理して、女の子だって悪くないと気分を変えたのかな。]

木製の荷車の上うつ伏せになっているフェイを発見した。お腹を下にした恰好で、車を足で前後にゆっくりと押したり引いたりを繰り返す。没頭しきっている。[おそらく自慰的な行為なのだろう。]

このしばらく後、彼女は机の上の‘馬’へと戻ってきた。彼女はまず乗馬している女性人形を手にとった。それからしばらく思案してるふうだったが、女性人形と馬とを何やら取っ組み合いさせ始めた。<あの男をぶちのめせ！>とか言っている。それから、彼女はタイガー(虎)とライオンを手にした。ライオンをいかにも愛してるふうにやさしく撫でている。それからタイガーが恐ろしげな唸り声をあげたかと思うと、ライオンに飛び掛った。フェイは、<タイガーがね、ライオンの片方の耳に噛み付いたの…>と説明する。

〔この遊びは、自慰行為のあとの‘去勢’をフェイが内心不安がっていることを表徴しているのだろうか。おそらく、性交する両親に、自らの自慰空想的攻撃欲やらその凶暴性を投影同一視していることに端を発しているであろうが…。案外このことは、フェイが得てして無気力・不活発に陥ることと関連しているのかも知れない。何やら心の内で抑圧されて眠っていたものが覚醒されつつある！〕

・1975/10/24・・・フェイは、兵隊さんの人形の剣が折れ曲がっているのに注目する。彼女は気掛かりなふうにくこれ、真っ直ぐじゃない・・・>と呟く。そこで自分で直して、まっすぐにした！〔これは、彼女が己れの‘去勢’意識にこだわり、自らの立ち直りを図ったとも言える。瑣末な出来ごとながら、意味深長だ！〕

マシューの父親がこの日の当番である。フェイは、その彼の存在を極度に意識している。まるで‘求愛ムード’といった印象である。例えば自分のドレスを彼に見せびらかす。そこで彼が、<とっても可愛いじゃないの>と言ってくれた。彼女は飛び上がらんばかりに喜んで、嬉しげに踊りまわったり、ぴょんぴょん跳ね回ったりした。

〔どんなにか「父親のお気に入りの娘」になりたいか、そんなフェイの願望がみごとに表されているようだ。おそらくこの点で日頃フェイはお姉ちゃんに負けてしまっているんだろう。〕

フェイは一人何やら物語の本を読んでいる最中、たまたまページ上にあつた裂け目に自分の人差し指を押し入れている。ほとんど無意識に…。〔おそらく自らのからだの下半身にある‘割れ目’にひどく関心が向いているのだろう。彼女の時折の凹んだ気分にも似ているかな？それで自分をどこか‘傷もの’扱いしてるのかな？〕

何やら自分だけの考えに没頭しているようすで、一人にして欲しいということらしい。やがて彼女が独り言を言ってるのが漏れ聞えた。<パパは今日ここにはいないのよね・・・>とやら。そしてしばらく後に、私が彼女にどんな‘秘密ごと’を考えていたのか教えてと言うと、ちょっと恥ずかしそうに微笑んで、いかにも打ち明けるふうに、<あのね、わたし、飛び跳ねる馬を持てたらいいなあって思ったのよ>と囁いた。

〔なかなかの自己洞察といえる。‘飛び跳ねる馬’とは、まさに彼女に活力を与えてくれる「父親・ペニス」の良き象徴であろうから・・・。〕

ミルク・サークルの時間、彼女はマシューの父親の隣の席に座った。それから、この時間の終わり頃になって、彼女はプレイヤーダーのジャッキーのところに行って、ぴったり抱きしめてもらいたがる。

〔パパ大好きとママ大好きのバランスを図っているともいえる、このフェイの慎重さがなかなか興味深い。〕

この後、外で遊ぶ時間になり、どの子も乗り物を得ようと躍起になる。トラックとか三輪車とか…。ところがフェイは残念ながら彼女のお気に入りの荷車を取り損ねてしまう。ジョーがいち早くそれを掴んでしまっていたからだ。そこで彼女はいかにも悔しげに、＜私には何も無いじゃないの…＞と泣き出す。そしてマシューの父親のもとへと駆け寄って、慰めてもらう。

この日、彼女は一枚の絵を描いた。そこには‘小さな女の子’が馬に乗っており、そこからちょっと離れたところに大きな樹木が一本描かれてあった。

〔彼女はこんなふうに自分の‘未来’を今生きている！今はまだグズグズした子だけど、「夢見る力」はまだ損なわれていない。これこそが救いだ！‘外なる子ども outer-child’の気概も充分である！〕

・1975/11/21…フェイは机に向って、そこにあった玩具の馬を一つ掴んだ。それから女性の人形も…。そして、その彼女を馬の背に乗せた。そして、そのまま馬は大いに跳ね回る。＜これは女の子 girl よ！ 男 man って言わなかった？！＞と、私の間違い(?)を咎め立てする。そしてここで実際に乗馬した女の子はハードルを飛び越える。そのハードルはどんどん高くなる。そしてフェイもまたどんどん勢いづいて熱くなり、馬をびよんびよんと地面上に飛び跳ねさせたり、あるいはハードルをガンガン飛び越えさせる。あまりに興奮が過ぎて、大騒ぎするものだから、ハリエッタとジャッキーがその騒音が喧しいと、時折フェイに注意を与えたほどであった。この彼女のはしゃぎようは珍しい。

〔間違いなく、この彼女の活力の源は、撮り込んだ良き象徴としての「父親ペニス＝馬」というわけだろう！女の子のフェイだって、いつか力強かつ逞しくなることだってあるということだが…！〕

ミルク・サークルの後、彼女は突然大泣きをし出した。そして台所にいたジャッキーにまわりついて、他の子どもらがうるさい noisy と訴えた。ついさっきまで自分も大いにうるさかった noisy ことも忘れて…。

〔ここに‘男の子の部分の自分 boy part of herself’を危険視し、牽制する彼女がいる。だからこそ、フェイは何やらそれを‘ヤバい’ものと感じ、そこで自己疎外を招いてしまう。それで敢えて彼女が‘弱っちい、メソメソした女の子’になることもないのだが…。ついつい結果はそのとおりになりがちだ。〕

しばらくして、外に出て遊んでいたフェイはどうやら気持ちを取り直したみたいだった。三輪車に乗りながら、＜私だって、すっごく早く走れるもん！＞と言ってる。どうやら‘男の子の自分’を取り戻したようだ。

・1975/12/05…彼女は鉄製のおもちゃの‘アイロン’に興味を覚える。そしてそれを手にして、私のところに持ってくる。それから私のドレスにアイロンを掛けるふりをして、いかにも愉快そうに面白い。それから、その少し後になるが、フェイが走り回っているのを見た。時折飛び跳ねてもいる。彼女の両脚の間には、ちょうど彼女の性器の辺りだが、そこにはなんと例のおもちゃの‘アイロン’が挟まれてあった！

[この場合、‘アイロン’は象徴的に‘馬’であり、すなわち逞しく力強い「父親ペニス」というわけか？ 徐々にいい意味で、彼女の中で摂り入れ introjection が起きている。それで‘弱っつい、メモメソした女の子’が俄然シャンとなる。希望が持てそうな…。だが、‘アイロン・ペニス’とは、両親間の性交において破壊的な要因を潜むという意味で、些か両価的 ambivalent ではあるが…。ここに彼女の心的混迷がありそう…。自慰空想 masturbatory phantasy の余波ともいえよう。]

何も言葉を言わず、フェイは私をくすぐり始めた。そして、<私ね、くすぐられるのが好きなの…>と耳打ちして言う。いかにもそれを私にやってもらいたがっているふうに誘ってる！そこで私が彼女をくすぐると、彼女は心の内から嬉しげにキャキャと笑い声をあげた。

[‘パパ大好き’があまりにも過剰になると、ママを失いかねないとして、再三彼女はどっちにも‘いい顔’しようと腐心する。右顧左眄を繰り返しながら、同性愛だったり異性愛だったり…。折々の‘転移感情’にフェイの真実があり、私自身それに付き合わせられながらも微笑させられた。]

積み木が収納されている入れ物の中におもちゃの‘馬’が紛れ込んでいるのをたまたま眼に止め、フェイはなぜかすごく嬉しそうな顔をした。[「父親ペニス」の象徴としての馬との、この親近感が実にいい！]……彼女は一枚の紙を折り曲げて‘飛行機’を作った。そこに自分の名前「Fay」と書き込む。彼女はとても嬉しげで誇らしそうでもあった。[紙飛行機は‘父親ペニス’の象徴。摂り入れ同一化している！]

彼女は木製の‘汽車’に乗っていた。前後に行ったり戻ったりをしている。その最中に、ふとちょっと思いついた！彼女はあちらこちらから物を集めてきて、その‘汽車’の中のスペースに(彼女の座席のちょうど真下)それらを仕舞いこんだ。一応‘乗客’ということであつたろう。実際に彼女が集めたものとは、おもちゃの消防車、空のプラスチックの容器、それにたくさんベルが付いている玩具であつた。

[どうもここで、私は何やら‘子どもをいっぱい孕んでいる妊婦さん’を連想させられた。女性特有の‘巣作りの本能’かな。微笑ましい。でも、だとしたら、そこにおもちゃの‘消防車’があるのは、何やら彼女のからだの中の‘火種’を予感した上での懸念からだろうか。「自慰空想」の悪しき余波をどこか意識している。また同時に、消防車とは「父親・ペニス」の良き象徴でもある。上記の‘アイロン・ペニス’との対照・関連性が実に興味深い…。なかなかこのフェイの無意識の営みは芸が細かいと感心した。つまりは彼女の「エディプス・コンプレックス」は前途多難といったところであろうが、それも彼女がそれを自ら‘知っている’、つまり無意識的に自覚しているということが凄い！]

・1976/01/23・・・フェイは看護婦さんの恰好をしている。看護婦さんの制服、それに帽子も頭に被っている。それでどうやらベッドに寝かされた人形たち(病児)のお世話をしているもようだ。彼女一人が、病棟の子どもらを一手に引き受けているらしく、とても忙しげで張り切っている。

〔「良き父親・ペニス」の摂り込みが効を奏してか、随分とフェイの活気が以前とは違う。この‘看護婦さんごっこ’は、象徴的に彼女が「母親の胎内 inside」の修復作業 reparation に取り掛かったともいえる。事実、フェイはもはや以前のような‘疲れきった worn-out 母親’ではない！彼女の活力源は甦った「母胎・母体 inside」にある！内的対象のありようは自ずと自らの内的現実を反映する。そしてその内的現実が整理整頓 (sorting-out) されてゆくなかで、さらにフェイの外的現実にも道が拓かれてゆく！躓きやら混迷がより少なくなっていくさうだ。そして自らが自らを抱えてゆくこととなろう！〕

彼女は小さな「オペラ・グラス箱」のなかを覗き込んでいる。そこに彼女は戦闘中の騎士やら馬がいっぱいいる戦場シーンを見た。＜わたしね、あの馬が好きだわ・・・＞と映像のなかの白い馬を指し示す。

〔「白馬の王子様」を夢見ること、そこにフェイの未来の希望がある。つい3ヶ月前 (1975/10/24)、＜わたしには何も無いじゃないの・・・＞と泣きじゃくっていた彼女はもうそこにいない。ここに至ってフェイの中で培われた期待感も挫かれまい。彼女がそう心に固く決めることからきつと未来は拓かれてゆくんだらう！〕

ミルク・サークルの時間、フェイは、2,3ヶ月年上になるマシューのお隣の席に座った。どうやら2人はとても気が合う仲良しのような雰囲気である。他の子どもたちがリズム運動の『大きくなろう&小さくなろう』をやっている最中も、フェイはマシューにお喋りするのにも忙しい。＜ねえ、知ってる・・・？＞とかあれやこれや。だが、歌を歌う番になると、明らかにお姉ちゃんから教えてもらって覚えたのであろう、彼女はたくさんの歌を次々に、とても上手に歌った。勿論、それはマシューにいい印象を与えずにはいなかった。自分の賢さを存分にマシューにアピールできたというわけだから、彼女は大いに得意満面であった。

フェイは私が身に着けていた服に興味を示す。＜ねえ、そのベルベットのおズボン、素敵ね。私もベルベットのお洋服あるわよ・・・＞と言う。彼女の女の子としての同一性が随分と安定し、こちらでどうか折り合いが付いてきたかのような印象がある。彼女の危なっかしい感じはいくらか失せていた。

・1976/03/12・・・フェイが新調したばかりのスカートを私に見せびらかしている。自慢したくて仕方ないみたいだ。それで結婚式の花嫁さんの付き添い (brides maid) 女の子のつもりになっている。そのまま夢心地でじっとお澄まして立っている。それから裾を持ち上げて回転し始める。とても女の子っぽい。そして勿論、彼女はそれを意識している！

〔ほんとは勿論花嫁さんになりたいのだけれど。取り敢えず今の自分の出番が確保されてあるというのがいい。現実的という点では、充分その可能性はあるわけだし。花嫁さんになるのはまだ遠い先の‘夢物語’だからして、当分お預けを食うよりはましだろう。付き添いの女の子 brides maid だって充分人々の注目を得るわけだし、悪くない。だから彼女は、その現実味のある‘夢物語’にむしろ浸ることにしたのだから！微笑ましい！〕

【補足】

或日のこと、フェイの母親が私に、娘のフェイについて語った。＜あの子ったら、あまりにおとなし過ぎる placid なんですの・・＞とのこと。その言わんとするところは、娘が母親とはその気質上まるで違っているということであるらしい。つまり、フェイは‘愚図な子ども’というわけだ。それで時折彼女にはうんざりさせられるし、その扱いにはしばしば手こずると母親が愚痴っていたことにもなる。

そして或る別の日、このようなことが観察された。フェイのお姉ちゃんがプレイグループにやってきた。彼女の脚に包帯が巻かれている。びっこを引いて歩いている。怪我をしたらしい。それでおそらく学校をお休みし、フェイの母親がこの日お当番だったので、付いてきたのであろう。そして、お帰りの時間、玄関口に程近い路上に駐車してあった車まで、母親と2人の娘たちは向かって行った。フェイのお姉ちゃんは母親の両腕に抱えられ、車まで運ばれた。ちょっと赤ん坊みたいに・・。フェイは彼女らの後に付いてゆきながら、鬱々とした風情である。彼女は母親に、＜私も抱っこ・・！＞とせがむ。母親はそれに対して＜ダメよ＞と答えただけ。そこで彼女は、＜私、パパが欲しい・・＞と声を張り上げる。そしてメソメソと泣き始めた。

どうやら母親とフェイは相性が悪いらしい。むしろ母親は活発な上の娘の方を鼻負してるらしいのは明らか。それをフェイは承知しており、だからどうしてもパパ寄りになる。でも彼女がパパのお気に入りかどうか、それもあまり確かではないみたいだ。彼女の慢性的な鬱々した気分がよく分かるような気がした。

誰かにとって自分が‘スペシャル’でありたいと願うことはごく自然で真っ当な感情である。その熾烈さを彼女の中にもみる。おそらく母親の中には、敢えて言うならば、＜ママに気に入られるようになりたいならば、あんたもいつまでも赤ちゃんしないで、お姉ちゃんになりなさい＞というのがあるんだろう。こうした母親の暗黙のメッセージを受け入れ、それに従うしかなかろう。そして、ごく自然に母親（及び父親）の‘活力 potency’に憧れ、それに倣うこと（同一化）がいずれ彼女の選択となろう。女の子の自分を受け容れ、かつ自分の中の‘男の子の部分’をも排斥せずといった具合に。此の点で、少しずつ統合性が取れて一人の人（person）としてまとまってゆく bringing herself together ならば、とてもいい。そしておそらくいつかフェイが「わたしはわたしでいいんだ・・」となればもったいいな、と私は内心思う。‘愚図の子ども’だって満更悪くもない。私にはフェイがどちらかというとても可愛く思えたものだから・・。

(2013/11/12 記)
